



編集後記

本誌がお手元に届くころには、立憲民主党の代表選は最終盤を迎えており、自由民主党の総裁選はたけなわという時期だろうか。

自民党総裁選は、順当にいけば我が国の首相を選出する大切な選挙であると思うのだが、それが党内改革やら、裏金やら、内向きの課題ばかりが争点というのは見えていても心許ないし情けないように思える。

さらに本稿を書いている時点で騒がれているのが、推薦人の確保である。自民党の総裁選における広報資料には「立候補には、党所属の国会議員20名の推薦が必要」と記されているが、衆議院議員116名、参議院議員82名の計198名(平成24年9月25日現在)もの推薦人候補が居ながら、そのとりまとめに苦慮しているという、実にお粗末な話なのだ。これは立憲民主党も同様で、そもそも立候補をするから推薦人を集めるという状況が、筆者には理解しがたい一面がある。

自民党の場合、派閥が解消される

前は、派閥内で調整して推薦人が確保されていたようだが、それもまた妙な話である。この推薦人制度は、田中角栄氏が選出された1972年の総裁選から始まったというが、当初の推薦人は10人だった。それが1977年には20人に増え、1982年には50人に引き上げられたが、その後、「開かれた総裁選を行うべきだ」との主旨で人数は段階的に減らされたという。

そもそも、推薦とはどういうことを考えれば、「立候補したいので推薦していただきたい」と頭を下げて回るのは笑止千万な話ではないだろうか。多くの人々に推される。つまり、他力が基本となつて推されて立候補するのが本来あるべき形なのではないだろうか。

言い換えれば、その人に対して多くの人が寄せる尊敬・信頼・期待の心を人望というが、推薦人を後ろ盾として行われる総裁選の候補者としてふさわしい姿は、まさに人望のある人物なのでないだろうか。

そう考えると、立候補したいから推薦人になって欲しいとお願ひする図は、人望を強要しているような有様で、どうもいただけないと思う。

最終的に首相となるべき人物と捉えれば、その器として、日本のそして世界の行く末のあるべき姿を語る事ができることが肝心で、さらに人望の厚い人物こそが、総裁選候補に相応しいのだ。残念ながら、党内改革や裏金問題の解消のような内向きの課題は、言われなくてもやって当然のことであり、少なくとも総裁選の争点となるべき内容ではないと思うのだ。

サル社会に例えるのは恐縮だが、ゴリラのボスは獲物を分け与え、ニホンザルのボスは常にチカラとその権力を誇示するという。

ほんとうに総裁に、首相にふさわしい、多くの人から推挙される人物は誰なのか、考えたい。そもそも、清く正しく美しい行いが前提なら、裏金問題など発生しない筈なのだが、いかがだろう。(溪)

月刊 公論

10月号 第57巻10号

令和6年10月1日発行 毎月20日発売
本体価格1,100円(税込) 送料87円

発行人 大中 吉一 編集人 林 溪清

発行所 株式会社財界通信社

〒160-0008 東京都新宿区四谷三栄町10-12 ボナフラービル

TEL.03-5379-5611(代) FAX.03-5379-5616

印刷所 株式会社広済堂ネクスト

取次店 日本出版販売/楽天ブックスネットワーク

●直接ご購入をご希望の方は、本社までお問い合わせ下さい。

●万一、乱丁、落丁などの不良品がございましたら、お取り替えいたします。